Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-04-04

自己と他者の関係に着目した幼児の自己調整機能の発達

藪田，小百合
林，創

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,14(2):1-10

(Issue Date)
2021-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012649

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012649

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要
第14巻第２号　2021

研究論文

自己と他者の関係に着目した幼児の自己調整機能の発達

Development of young children's self-regulation by focusing on the relationship between self and others.

藪田　小百合*　　林　創**
Sayuri YABUTA*　　Hajimu HAYASHI**

要約：本研究は，幼児期の自己調整機能の決定要因を自己と他者の関係に着目し，幼児の自己調整機能の発達メカニズムを検討したものである。4～5歳児41名を対象として，仮想課題の紙芝居を用いて，自分が遊んでいた玩具を取られてしまう「自己先取場面」，他児が遊んでいる玩具で遊びたくなる「他者先取場面」，他児と同時に玩具を見つける「対等場面」の3場面を想定させた。その後,「行動型」「発話型」「行動抑制型」の3枚の絵カードを提示し,自分がどのような行動をとるか選択してもらった。カードを選択してもらったあと，どうしてそれを選んだのか，理由質問を行った。幼児の回答を長濱・高井（2011）を参考に，自分の欲求や意志を尊重する「自己尊重」,他者の欲求や意志を尊重する「他者尊重」,自分の主張と相手の主張を尊重する「自他尊重」,「その他」の4カテゴリーに分類した。その結果，自己先取場面，他者先取場面において5歳児は4歳児よりも「自他尊重」が有意に多かった。このことから，自己調整を決定する要因は，年齢が上がるにつれて自他双方を考慮したものへと変化することがわかった。また，理由質問の回答を分析した結果，5歳児は自他双方を考慮しながらも，場面に合わせてさらに細かく変化させるといった，より高度な自己調整を行うことが明らかになった。

キーワード：自己調整機能，自他尊重，幼児

問題と目的

自己調整機能

人間は他者との相互作用の中で生活している。それゆえ場面や状況に応じて自らの行動を適切に選択し，行動に移すことは社会で生きていく上で重要なことである。それらを説明するうえで重要なものの一つとして,「自己調整機能」という概念が存在する。柏木（1988）は自己調整機能について,「欲求や感情をそのとき自分が置かれた状況を考慮した上で，抑制するべきときには抑制し、主張するべきときには主張する能力」としている。

自己調整機能と似た概念に「自己制御（self-regulation）」がある。自己制御は自己の行動，感情，心身の状態などを，自律的に統制・調整することである。自己制御は主に2つに大別される。一つは自己の欲求や目標を抑制したり遅延したりする自己抑制の側面であり，もう一つは自分の意志を主張し実現する自己主張の側面である。鈴木（2005）は自己調整機能に関して，欲求や感情を調整し，状況に応じた適切な行動をするための機能と述べている。これらのことを踏まえて，本研究では自己調整機能と自己制御は同じ概念とみなし，以下では自己調整機能に言葉を統一することとする。また，本研究では自己調整機能について，前述の柏木（1988）の定義に沿うものとする。

幼児期は自己調整機能の発達において，極めて重要な時期であるとされている。Bronson（2000）は幼児期の子どもたちは感情や行動を統制したり，他者と積極的にやり取りしたり，学んだりすることが可能になると述べている。また，文部科学省（2009）の「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」では，幼児期は友達との葛藤の中で自らの感情や意志を表現し，十分な自己の発揮と他者の受容を経験し，こうした体験を通じて道徳性や社会性の基盤が育まれるとされている。このように幼児期は他者とのかかわりの中で自己調整機能の発達が始まる大事な時期であり，それらが社会性や道徳性につながるのである。そこで本研究では自己調整機能のメカニズムを調べるために，幼児期に焦点を当てる。

自己調整機能についての研究

先ほど，自己調整機能は自己抑制と自己主張の2つに分けられると述べた。まず，研究が進められたのは「自己抑制」の側面である。「誘惑への抵抗」や「満足の遅延」などの実験的研究が主に海外で行われた。「満足の遅延」の代表的な実験であるマシュマロテストの縦断的研究では，4～5歳の時に待てる秒数が長いほど，後の大学進学適性試験の点数が良く，青年期の社会的・認知的機能の評価が高かった。また，長く待てた人は27～32歳にかけて，肥満指数が低く，自尊心が高く，目標を効果的に追求し，欲求不満やストレスにうまく対処できた（Mischel, Shoda, & Rodriguez, 1989）。また，

＊神戸大学大学院人間発達環境学研究科

（2020年９月30日　受付
2020年12月４日　受理）

別の研究では，抑制機能の発達により，道徳性の発達，さらには情動理解や情動表出のコントロールが可能になることが知られている（Kochanska, Murray, & Coy, 1997; Carlson, & Wang, 2007）。しかし，これらはいずれも自己調整機能における「抑制」や「統制」に焦点を当てた研究である。

日本において，自己主張の側面も含めて自己調整機能の発達的メカニズムを報告したのが，柏木（1988）の研究である。柏木（1988）は3～6歳の子どもについて，幼稚園の教師に対して質問紙調査を行い，各年齢で自己抑制行動と自己主張行動がどのくらい現れるかを検討した。その結果，自己抑制に関しては年齢の上昇に伴って増加していくのに対し，自己主張は4歳を境に発達と停滞を繰り返すことを明らかにした。その理由として，日常の友達との遊び場面で出会う自他の欲求のぶつかりあう場面で，日本の子どもは抑制的制御に傾く傾向が認められているなど（田島・氏家・柏木，1986），日本では自己をあからさまに表明したり，実現したりすることよりも，むしろそれを抑え，直面した課題や集団の秩序に沿い人との調和を保つ方が望ましいとされるからであるとしている。

山本（1995）は，対人葛藤場面での問題解決方略における自己主張の質的分析を行った。幼児に対人葛藤場面の仮想ストーリーを見せ，あらかじめ用意された問題解決方略に関する12の絵カードを提示し，幼児がどの方略を選択するかを検討したものである。12の絵カードのうち，自己主張解決方略に関するものは6枚，「泣く」「諦める」「我慢」などの非自己主張方略に関するものは6枚である。自己主張解決方略は「身体的攻撃による自己主張対応」「非言語的な獲得による自己主張対応」「他者依存的な自己主張対応」「説得・抗議による自己主張対応」「協調的な自己主張対応」「向社会的な自己主張対応」がある。山本（1995）は相手の親密さとおもちゃの個数などの状況認知を条件に設定した。その結果，幼児における自己主張方略は相手の親密さや状況認知の影響を受けながら，年齢の増加とともに，非言語的で利己的な自己主張方略から，言語的で自他双方の要求を考慮した自己主張方略へと質的に変化することが示された。

実験課題と仮想課題の2つを用いて，両課題における反応の関連とその発達的変化を検討したのが鈴木（2005）である。4～6歳児を対象に，魅力的なおもちゃに対する誘惑抵抗状況を自己抑制状況，「後でこのおもちゃで遊ぼうね」という約束を忘れ去られてしまう状況を自己主張状況と設定し，それらの状況で参加児がどのような行動をとるかを観察した。加えて，紙芝居を用いて仮想的な対人葛藤状況における反応を同時に測定した。仮想課題では，実験課題と似たような状況を紙芝居で提示し，自己抑制状況，自己主張状況の各2題について,「行動」「自己抑制」「自己主張」の3枚の絵カードから，自分ならどの行動をするかを選択させた。その結果，仮想課題では年齢が上がるとともに，状況に一致した反応を選択する子どもが増加するのに対し，実験場面では状況に一致した行動をとる参加児の数には年齢差が見られなかった。自己主張状況では仮想課題で状況に一致した反応を選択した子どもでも，実験課題では実際に自己主張することが難しいことが示唆された。

また，長濱・高井（2011）は物の取り合い場面を用いて，自己調整機能のこれまでの2つの側面に「自他調整」という側面を加えて検討した。この自他調整は，相手と自分を調整するという2側面を併せ持つものと定義されている。また，場面の要因として自分が遊んでいた玩具を取られてしまう「自己先取場面」，他児が遊んでいる玩具で遊びたくなる「他者先取場面」，他児と同時に玩具を見つける「対等場面」という3つを状況に設定した。物の取り合い場面は実際に長濱・高井（2011）が保育所での予備調査を行い，どのような葛藤状況が就学前期の社会生活によく見られるのかを観察し，最も多く観察された場面である。また山本（1991）の観察により，先に玩具を占有していた幼児がその争いに勝つことが多い傾向が知られていた。長濱・高井（2011）はこれらを考慮し，場面による幼児の反応の違いを調べ，玩具をめぐる自分と他者の置かれている状況が，自己調整の仕方に影響するかについても検討した。具体的には，まず幼児に物語の紙芝居を提示後，口頭回答を求め，その後，場面ごとに選択肢による反応も調べた。口頭回答を用いることで，幼児本来の考えを聞き出せると考えたからである。その結果，年齢が上がるにつれて口頭回答において「自他調整」の回答が増加し，特に対等場面で多く用いられることが示された。しかし，選択回答ではどの年齢においても場面による有意な差はなかった。また，口頭回答と選択回答との間に有意な関連は見出されなかった。

自己調整機能に関する研究の新たな視点

以上の対人場面における自己調整に関する研究で，年齢が上がるにつれて，自己抑制は伸びる一方で，自己主張は伸びとどまるか，あるいは，自他双方の要求を考慮したより協調的な自己主張がなされることが示された。佐藤（2001）によると日本の子どもたちは自己主張が苦手であり，独創性がないと問題視されてきた。確かにコミュニケーションスキルが求められる現代で，他者の前で自らの意見をはっきりと述べることは重要である。しかし，柏木（1988）は自己主張と自己抑制を相反するものと捉え，どちらが大切であるかなど，片方に焦点が当てられることに対して批判している。一見方向を異にする自己主張と自己抑制は，「自己」が行動に関与し制御機能を果たすという点では共通しており，2つの面が十分に機能していることが，自己調整機能の発達において重要であると述べている。いずれも自分の意志・目標・欲求と深く関わるもので，自己主張と自己抑制の違いはそれらを表出・実現するのか，または，制止・抑制するのかという制御の方向であるとしている。すなわち，自己調整機能において大切なのは，ある場面において選択するものが自己抑制であっても，自己主張であっても，それが本人の意志・目標・欲求に関わった能動的なものであることといえよう。

田島他（1986）は大人が自己主張すべきだとみなした仮想場面において，子どもは抑制すべきだとみなし，実際にそのような場面で抑制的に行動できた時，子どもは自分に有能感を感じることを見出した。一方で自己主張すべきだとしてそのように自己主張的に行動した場合には，有能感はむしろ低かった。これらのことから，子どもは大人が主張すべきだとする場面においても自己抑制する傾向をもち，またそのことに子どもは価値を認め，満足を感じていることがわかる。

従来の先行研究では，自己主張状況や自己抑制状況を設定しその状況に一致した反応を示すか否か，といった自己調整機能の検討方法がなされてきた。しかし，先ほども述べたように，ある場面において大人と子どもの望ましいと考える自己調整は必ずしも一致する

とは限らない。柏木（1988）が述べるように，自己調整機能において大事なのは，状況に一致した調整を行うことよりもむしろ，その調整に自分なりの意志・目標・欲求があるかどうかであると考えられる。しかし，なぜその調整方法を選んだのかという自己調整機能の理由に焦点を当てて検討を行っている研究は少ないようである。そこで本研究では，幼児はどのような意志をもって自己調整を決定したり，場面によって変化させたりするのかを検討し，自己と他者双方の関係の中から自己調整機能の発達を見ていくことを目的として設定する。

「自己調整機能」を自己と他者双方の関係から見ることに焦点を当てる理由は2つある。1つ目は長濱・高井（2011）が提唱した「自他調整」は相手と自分を調整するというものであり，これは山本（1995）の自己主張解決方略の中の「協調的な自己主張対応」にあたるものである。このように従来から「自己調整」を自己と他者の関係から検討するものが多く存在し，集団で生活している幼児にとって，自己と他者が関与する日常に近い場面を提示することは，より生活場面に即した自己調整を表現しやすいと考えたためである。2つ目は川田（2019）によると，子どもの主体性や自己決定は，他者や環境との関係においてのみあらわれ，他者とのかかわりの中で育まれていくものであるとされている。「子どもの主体性や自己決定」は本研究が着目している自己調整機能の理由に大きく関与する部分であり，これらが他者とのかかわりの中で育まれていくのであれば，他者という存在は自己調整の発達において重要な役割を担っていると考えられるからである。

先行研究の問題点

本研究では長濱・高井（2011）で用いられた，自分が遊んでいた玩具を取られてしまう「自己先取場面」，他児が遊んでいる玩具で遊びたくなる「他者先取場面」，他児と同時に玩具を見つける「対等場面」の3場面を採用する。その理由として，幼児の対人葛藤場面で物の取り合い場面がよく観察されること，そして従来の先行研究では自己主張状況や自己抑制状況などの場面設定が行われていたが，望ましいとされる状況を作り出して回答を引き出すよりも，上記にあげた3場面を採用する方が幼児によって選択反応に個人差が出やすく，理由も場面によって変化しやすいと考えたからである。3場面の主な違いはおもちゃの所有権にある。自己先取場面では最初に所有権を所持しているのは自分である。同様に他者先取場面では他者が所有権を所持しており，そして，対等場面では自分と他者どちらとも所有権を所持していない状況にある。山本（1991）の「先占の尊重」原則によると，幼児は先に物を有した場合に行動主張を行うことが示されている。したがって，本研究では場面差を所有権の有無の差として見ていくとともに，所有権の有無により，幼児がどのように他者への働きかけを変化させるのかという点を検討する。

長濱・高井（2011）の研究では，口頭回答では自他調整的な回答が見られたのにも関わらず，選択回答では後の回答に影響が出ることを懸念して「自他調整」のカードを選択肢から除外した。その結果，口頭回答と選択回答の間で有意な関連は見られなかった。もとより，長濱・高井（2011）は自己主張，自己抑制，自他調整を別のものとして捉えていた。しかし，自己調整機能が必ずしもこの3つのいずれかに当てはまるとは限らない可能性がある。

また，「自己主張」カードを提示するときの教示は，「『返して』と言う」であり，「自己抑制」カードを提示するときの教示は，「我慢する」である。この教示は自己主張や自己抑制が自己を中心に行われるものであるとしており，自己主張や自己抑制の中にある意図や考えを限定してしまっている。

これらの問題点を考慮し，本研究では，自己主張や自己抑制が必ずしも自己を中心にのみ行われているとは考えず，「他者や自他双方を意図したもの」も含まれるとする。このことを検討するために，選択回答の種類や教示の仕方をより自由度の高いものにする。従来の研究では，「行動」「自己主張」「自己抑制」の3枚の絵カードを用いるのが主流であったが，山本（1995）の研究からもわかるように，「自己主張」の中でも段階に分かれており，「説得・抗議による自己主張対応」であるのか「協調的な自己主張対応」であるのかによって自己調整のとらえ方は異なってくる。そこで本研究では自己調整機能の質的な差が明確になるように絵カードとして「行動型」「発話型」「行動抑制型」の3枚を用意する。絵カードを提示し，選択してもらったあとになぜそのカードを選んだのかについて理由を尋ねるようにする。そうすることで，自己主張の中でも自己抑制的なものや自他調整的な回答，自己抑制の中でも自己主張的なものや自他調整的な回答など，幼児によって自己調整方法に何らかの意図が見いだせると考えられる。また，長濱・高井（2011）の研究において，3歳児は口頭回答において無反応が多く見られたことから，理由を尋ねるにあたって自らの思いを言語化するのは困難であると考え，本研究では対象を4・5歳児に設定する。

本研究の目的と予想される結果

以上のことを踏まえ，本研究では目的を2つ設定した。①対人葛藤場面における自己調整機能を決定する要因を自己と他者の関係から発達的に検討すること，②おもちゃの所有権の在り処という場面差によって幼児は自己調整方法を変化させるのかを検討することとした。目的①では，山本（1995）より，幼児は年齢が上がるにつれて自他双方の要求を考慮することから，年齢が上がるにつれて自己調整機能を決定する要因は他者，または自他を尊重したものに変化すると予想される。目的②では，長濱・高井（2011）より，幼児は年齢が上がるにつれて，同じ調整の仕方でも場面間で方法を変えていることから，年齢が上がるにつれて自己調整機能を決定する要因はより場面を，すなわち，所有権の在り処を考慮したものになると予想される。

なお，本研究は，神戸大学大学院人間発達環境学研究科における倫理審査を受け，承認を得て実施した（受付番号356）。

方 法

参加者　神戸市内の幼稚園に通う幼児41名（男児20名，女児21名）が実験に参加した。内訳は4歳児クラスの幼児（男児10名，女児11名；平均年齢5歳2ヵ月）が計21名，5歳児クラスの幼児（男児10名，女児10名；平均年齢6歳2ヵ月）が計20名である。参加者全員に3つの場面の紙芝居を見せ，その後の質問に答えてもらった。

材料　紙芝居6つ（男児用3つ・女児用3つ），絵カード3枚（行動型・発話型・行動抑制型），絵カードが並べられる机1つ，記録用

にスマートフォンを用いた。

課題と手続き　幼児に対して，1人ずつ個別に実施した。まず対人葛藤場面の紙芝居を見てもらい，その後，「こんな時○○ちゃんならどうするか」を尋ね，絵カードを提示し，選択させた。その後，「なぜそれを選んだのか」と尋ね，口頭回答を求めた。それを紙芝居の場面ごとに行った。また，紙芝居に関しては3場面をカウンターバランスで行い，絵カードの提示に関しては行動型，発話型，行動抑制型という順序を変えずに実施した。

（1）課題

紙芝居は，長濱・高井（2011）の研究で用いられた対人葛藤場面の内容を参考にした。物語は全て3枚からなり，同年齢かつ同性の友達との間に物（玩具）をめぐる対人葛藤が生じる内容であった。紙芝居は全部で3場面あり，自分が遊んでいた玩具を取られてしまう「自己先取場面」，他児が遊んでいる玩具で遊びたくなる「他者先取場面」，他児と同時に玩具を見つける「対等場面」の3場面を男児用と女児用それぞれ作成した。具体的なストーリーは「自己先取場面」では，砂場でスコップを使って遊んでいるとお友達がやってきて，お友達に使っていたスコップを取られてしまうというものとした。「他者先取場面」では，お外にいるとお友達がシャボン玉で遊んでいるのを見つけて，お友達の使っているシャボン玉で遊びたくなるというものとした。「対等場面」では，お外にいるとお友達とボールを同時に見つけて，お友達とボールを取り合いになってしまうというものとした。紙芝居の主人公は参加児で，参加児の性別に合わせて，物語の男の子，または，女の子に自らを投影してもらった。

（2）手続き

長濱・高井（2011）を参考に，次の手続きを参加者一人ずつに実施した。実験はふだん人の出入りが少なく，静かで集中して紙芝居が聞ける遊戯室で行われた。幼児が遊戯室に入ると机に見立てた積み木が置いてあり，実験者と対面で座るように幼児に促した。実験が終わると，「先生に終わったよって教えてあげてね」と伝え，部屋に戻ってもらった。

①導入　幼児の名前を尋ねた後，「今日は3つ紙芝居を持ってきたよ。紙芝居の内容はよく似ているけど，よく聞いたら違うところがあるからよく聞いていてね」という教示を行った。

②試行　紙芝居を見せ，主人公の男の子（女の子）に関しては「これは○○くん（ちゃん）だと思ってね」，お友達に関しては「これは○○くん（ちゃん）のお友達だよ」という教示を行った後，紙芝居を始めた。次に選択カードを用いた質問を行った。1つの場面が終わるごとに，「こんなとき○○くん（ちゃん）ならどうするかな。今から3枚のカードを見せるから，○○くん（ちゃん）ならどうするか教えてね」と伝えた。3枚のカードの提示順は「行動型」「発話型」「行動抑制型」であった。「行動型」を提示する時には「お友達から何も言わずに取っちゃうかな（取り返すかな）」，「発話型」を提示する時には「お友達に何か言うかな」，「行動抑制型」を提示する時には「何もせず我慢するかな」とそれぞれ教示を行った。次に理由質問に移り，幼児が選んだカードが「行動型」または「行動抑制型」であった場合，「どうしてそれを選んだのかな」と尋ね，「発話型」であった場合，「どんなことを言うの」と尋ねた後，「どうしてそう言おうと思ったのかな」と質問を続けた。「発話型」でまず「どんなことを言うの」と尋ねることにした理由は，幼児が質問に対して具体的にイメージして答えやすいのではないかということに加え，幼児による理由の個人差が詳しく見られるのではないかと考えたからである。

結　果

口頭回答の分類　口頭で得た回答から，長濱・高井（2011）の22の下位カテゴリーの定義を参考にそれぞれ分類した。本研究では理由を尋ねたことにより，回答がさらに細分化できると考え，新たなカテゴリーとして「共感」「いざこざ回避」「発話のみ」を加え，25の下位カテゴリーを設定した（Table 1）。全ての対象児の口頭回答における25の下位カテゴリーへの分類については，筆頭筆者と1名の心理学を専門とする学生で行い，評定者間の一致率を一致率／評価数で求めた。その結果，一致率は0.80であった。なお，不一致の箇所は協議により一致した。

長濱・高井（2011）は22の下位カテゴリーを，自分の欲求や意志を表現する，または実行する「自己主張」，自分の欲求や意志を抑制，または制止する「自己抑制」，自分の主張と相手の主張を尊重し調整する「自他調整」，どれにも属さない「その他」の4つの上位カテゴリーに分類した。しかし，「問題と目的」でも述べたように，自己主張や自己抑制の中にも自己だけでなく，他者，または双方を考慮したものが含まれていると考え，本研究では自分の欲求や意志を尊重する「自己尊重」，他者の欲求や意志を尊重する「他者尊重」，自分の主張と相手の主張を尊重する「自他尊重」，どれにも属さない「その他」の4つの上位カテゴリーを設定し，自己調整の決定要因カテゴリーとして分類した（Table 2）。下位カテゴリーの上位カテゴリーへの分類についても，長濱・高井（2011）の分類を参考にした。

以上の分類をもとに，3場面において，年齢ごとに上位カテゴリーと下位カテゴリーの出現度数を調べて集計したものをTable 3に示す。

自己調整の決定要因カテゴリーの年齢間の比較

まず，年齢別，場面別に，自己調整の決定要因カテゴリーにおいて男女差が見られるかχ^2検定を行ったところ，いずれの分析においても有意な差はなかった。そこで性別を込みにして，年齢（4歳児，5歳児）×自己調整の決定要因カテゴリー（自己尊重，他者尊重，自他尊重，その他）のχ^2検定を，場面ごとに行った。その結果，自己先取場面（$\chi^2(3) = 11.10, p < .05$），他者先取場面（$\chi^2(3) = 14.25, p < .01$）で有意な差が見られた。一方で対等場面において，有意な差はなかった（$\chi^2(3) = 5.09, ns$）。さらに残差分析を行ったところ，自己先取場面と他者先取場面，双方において，Table 4，Table 5に示したように，「自他尊重」は，4歳児に少なく，5歳児には多く見られた。「自己尊重」は自己先取場面において4歳児に多く，5歳児には少なかった。また，「その他」は他者先取場面において4歳児に多く，5歳児には少なかった。

自己調整の決定要因カテゴリーに関する場面差

4種の自己調整の決定要因カテゴリーが，各場面でどのような変動を見せているかについてコクランのQ検定を用いて年齢別に調べ

Table 1　口頭回答を分類する下位カテゴリー

カテゴリー	定義
譲渡	相手に玩具を譲る
我慢	相手の持っている玩具を取らない
代替行動	代わりの玩具で遊ぶ
代替物	相手に代わりの玩具を差し出してその使用を提示する
略奪	取る，取り返すことで玩具を所持する
攻撃	相手に身体的苦痛を与える
依頼	玩具を所持するために頼む
限定	時間的・量的な限定を加えて玩具を所持するために頼む
条件	時間的・量的な限定以外の条件を出す
拒否	相手の行動を言語で拒否する
先行所持	自分が相手より先に使用・所持していたことを示す
使用中	自分が今使っていること，まだ使っていることを示す
じゃんけん	じゃんけんで玩具を所持する人を決める
順番	順番に使う。どちらが先に所持するかは断定しない
先行	順番だが，自分が先に所持する
後行	順番だが，自分は後で所持する
一緒	対象の玩具を 2 人で一緒に使う，または一緒に使うことを提案する
共感	相手の気持ちや感情を推し量る
いざこざ回避	相手といざこざになることを避ける
他者依存	自分で解決せず，他人に解決してもらう
結果予測	場面状況について，どうなるかの予測
善悪判断	場面状況について，良いか悪いかの判断
感情	場面状況における自分の感情
謝罪	相手に謝る
発話のみ	理由はわからないが「発話型」を選択

注．上記に当てはまらないものを「その他」とした。

Table 2　4 つの自己調整の決定要因カテゴリー

上位カテゴリー	下位カテゴリー
自己尊重	代替物，略奪，攻撃，依頼，拒否，先行所持，使用中
他者尊重	譲渡，我慢，代替行動
自他尊重	限定，条件，じゃんけん，順番，先行，後行，一緒，共感，いざこざ回避
その他	他者依存，結果予測，善悪判断，感情，謝罪，発話のみ，その他，D.K.，N.R.

注 1．D.K.は「わからない」，N.R.は無反応を示す。

Table 3　上位カテゴリーと下位カテゴリーの出現度数（カッコ内は％）

場面	年齢群	上位カテゴリー	下位カテゴリー
自己先取場面	4 歳児（$n = 21$）	自己尊重 11（52）	依頼 5（24），略奪 2（10），拒否 1（5），先行所持 2（10），他者依存 1（5）
		他者尊重 1（5）	代替行動 1（5）
		自他尊重 2（10）	一緒 1（5），いざこざ回避 1（5）
		その他 7（33）	発話のみ 3（14），善悪判断 2（10），D.K.2（10）
	5 歳児（$n = 20$）	自己尊重 4（20）	先行所持 4（20）
		他者尊重 4（20）	譲渡 4（20）
		自他尊重 9（45）	順番 3（15），先行 2（10），限定 2（10），いざこざ回避 2（10）
		その他 3（15）	発話のみ 3（15）
他者先取場面	4 歳児（$n = 21$）	自己尊重 10（48）	依頼 10（48）
		他者尊重 0（0）	
		自他尊重 2（10）	共感 1（5），一緒 1（5）
		その他 9（43）	我慢 1（5），善悪判断 2（10），発話のみ 2（10），D.K.4（19）

	5 歳児（$n = 20$）	自己尊重 5（25）	依頼 5（25）
		他者尊重 1（5）	我慢 1（5）
		自他尊重 12（60）	限定 1（5），後行 4（20），順番 1（5），一緒 4（20），共感 1（5），いざこざ回避 1（5）
		その他 2（10）	発話のみ 1（5），その他 1（5）
対等場面	4 歳児（$n = 21$）	自己尊重 3（14）	依頼 2（10），略奪 1（5）
		他者尊重 3（14）	譲渡 2（10），代替行動 1（5）
		自他尊重 8（38）	一緒 3（14），順番 2（10），後行 1（5），じゃんけん 1（5），いざこざ回避 1（5）
		その他 7（33）	善悪判断 2（10），発話のみ 3（14），D.K.2（10）
	5 歳児（$n = 20$）	自己尊重 1（5）	依頼 1（5）
		他者尊重 4（20）	譲渡 3（15），我慢 1（5）
		自他尊重 13（65）	一緒 4（20），先行 1（5），後行 2（10），じゃんけん 2（10），順番 1（5），共感 1（5），いざこざ回避 2（10）
		その他 2（10）	発話のみ 1（5），その他 1（5）

注．数字は人数。（　）内は%。D.K.は「わからない」を示す。

Table 4　自己先取場面における自己調整の決定要因カテゴリーの出現度数と残差分析結果

	自己尊重		他者尊重		自他尊重		その他	
	度数	残差	度数	残差	度数	残差	度数	残差
4 歳児（$n = 21$）	11	2.152*	1	-1.490	2	-2.563*	7	1.366
5 歳児（$n = 20$）	4	-2.152*	4	1.490	9	2.563*	3	-1.366

注．数字は人数。*$p < .05$

Table 5　他者先取場面における自己調整の決定要因カテゴリーの出現度数と残差分析結果

	自己尊重		他者尊重		自他尊重		その他	
	度数	残差	度数	残差	度数	残差	度数	残差
4 歳児（$n = 21$）	10	1.503	0	-1.037	2	-3.407**	9	2.374*
5 歳児（$n = 20$）	5	-1.503	1	1.037	12	3.407**	2	-2.374*

注．数字は人数。**$p < .01$, *$p < .05$

Table 6　3 場面における年齢別絵カードの選択反応数

	選択肢	4 歳児	5 歳児
自己先取場面	行動型	2	0
	発話型	15	16
	行動抑制型	4	4
他者先取場面	行動型	0	0
	発話型	18	18
	行動抑制型	3	2
対等場面	行動型	1	0
	発話型	16	18
	行動抑制型	4	2

注．　数字は人数，4 歳児は $n = 21$，5 歳児は $n = 20$。

た。その結果，「自己尊重」については，4 歳児においてのみ場面間に有意な差が見られた（$Q\ (2) = 9.50, p < .01$）。そこで McNemar の検定で 2 場面間の比較を行ったところ，自己先取場面と対等場面，他者先取場面と対等場面との間にそれぞれ 5% 水準で有意差が見られ，対等場面よりも自己先取場面，対等場面よりも他者先取場面で「自己尊重」が多いことが明らかになった。

「他者尊重」については，どの年齢においても，場面間に有意差は見られなかった。「自他尊重」については，4 歳児においてのみ場面間に有意な差が見られたため（$Q\ (2) = 8.00, p < .05$），McNemar の検定を行ったところ，他者先取場面と対等場面との間に 5% 水準で

Table 7　3場面における自己調整の決定要因カテゴリー別の絵カードの選択反応数

	自己先取場面				他者先取場面				対等場面			
	自己尊重	他者尊重	自他尊重	その他	自己尊重	他者尊重	自他尊重	その他	自己尊重	他者尊重	自他尊重	その他
行動型	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
発話型	12	0	11	8	15	0	14	7	3	3	21	7
行動抑制型	1	5	0	2	0	1	0	4	0	4	0	2

注．数字は人数。

有意差が見られた。このことから，4歳児では「自他尊重」が他者先取場面よりも対等場面で多いことが明らかになった。「その他」については，どの年齢においても，場面間に有意差は見られなかった。

選択回答の結果

次に，3つの絵カードの選択と自己調整の決定要因の関係を検討する。各場面における3つの絵カードの選択反応の出現数を示したものがTable 6である。

まず年齢別，場面別に選択反応において男女差が見られるかχ^2検定を行ったところ，いずれの分析においても有意差は見られなかった。そこで性別を込みにして，年齢（4歳児，5歳児）×選択回答（行動型，発話型，行動抑制型）のχ^2検定を場面ごとに行ったが，いずれの場面においても有意差は見られなかった。また，選択回答ごとに，その出現数について年齢別にコクランのQ検定を行ったが，有意ではなかった。

年齢を込みにして，口頭回答の自己調整カテゴリーの反応と選択回答の関係について，場面ごとに口頭回答の自己調整カテゴリー（自己尊重，他者尊重，自他尊重，その他）×選択反応（行動型，発話型，行動抑制型）を集計したものがTable 7である。「行動型」は3場面を通じてほとんど選択されなかった。「発話型」は，自己先取場面と他者先取場面において「自己尊重」，「自他尊重」が多かった。対等場面では「自他尊重」が多かった。「行動抑制型」は，自己先取場面と対等場面において「他者尊重」がやや多く，他者先取場面では「その他」がやや多かった。

考　察

「自他尊重」の発達

本研究の目的の一つ目は「対人葛藤場面における自己調整機能を決定する要因を自己と他者の関係から発達的に検討すること」であり，仮説は「年齢が上がるにつれて，自己調整機能を決定する要因は，他者，または自他を尊重したものに変化する」であった。

結果は自己先取場面，他者先取場面において「自他尊重」の回答を行った人数は年齢が上がるにつれて増加した。一方で「他者尊重」の回答は年齢に関わらずあまり見られなかった。ゆえに，仮説は一部が支持されたと考えられる。その傾向は，他者先取場面においてより顕著となった。他者先取場面は他児が遊んでいる玩具で遊びたくなる場面である。5歳児は4歳児よりも先に使っていた他者を考慮した上で発話する内容が多く見られた。例えばTable 1で示した口頭回答を分類するカテゴリーの中でも，5歳児では順番だが，自分は後で所持する「後行」の回答を5歳児の20%が行った。順番ではあるが，自らが進んで後で使うという点は自分の願いを主張しつつ，他者にも配慮しているといえる。

また，Table 4より自己先取場面において4歳児は「自己尊重」の回答が有意に多く見られた。これは山本（1991）が示した先に物を有した場合に行動主張を行うという「先占の尊重」原則と関係しているのではないかと考えられる。自己先取場面は自分が先に遊んでいた玩具を取られてしまう場面である。そのため，自らが所持することを当然として考え，「自己尊重」的な回答が多かったのだと考えられる。

対等場面では年齢間に有意な差はなかった。Table 3に示したように，4，5歳児両方とも「自他尊重」の回答が対等場面はほかの場面に比べて多く，結果的に年齢による調整の変化は見られなかった。対等場面は他児と同時に玩具を見つける場面である。この状況は玩具の占有に関して自分と他者が平等であることを示している。そのため，「先占の尊重」原則が適用されず，結果的に自他尊重的な回答が増加したのだと考えられる。

このことから，幼児は年齢が上がるにつれて，自己調整機能を決定する要因は，自他を尊重したものに変化するが，4歳児であっても，他者と平等な状況であれば，自他を尊重した調整方法を行うことが示唆された。

自己調整の場面差

本研究の目的の二つ目は「おもちゃの所有権の在り処という場面差によって幼児は自己調整方法を変化させるのかを検討すること」であった。仮説は「年齢が上がるにつれて自己調整機能を決定する要因はより場面を，すなわち，所有権の在り処を考慮したものになる」であった。

場面差の分析の結果，4歳児においては，対等場面よりも自己先取場面，他者先取場面において「自己尊重」が有意に多かった。また，4歳児においては，他者先取場面よりも対等場面において「自他尊重」が有意に多いことも示された。この結果は先行研究とは一致せず，5歳児よりも4歳児が場面によって自己調整方法を変えているといえよう。しかし，5歳児の中ですべての場面において，「自他尊重」の回答をした子どもは20人中8人と半数近くも存在したことを考慮すると，5歳児は調整方法を場面によって変化させるのではなく，場面に限らず一貫して自己と他者を尊重した調整を行っているということが考えられる。

また，Table 3を参考に口頭回答の質的分析を行ったところ，5歳

児は自己先取場面では自分が相手より先に玩具を使用・所持していたことを示す「先行所持」や順番だが，玩具を自分が先に所持する「先行」の理由を答える割合が4歳児に比べて多い。他者先取場面においては，順番だが，玩具を自分は後で所持する「後行」の理由が4歳児には現れず,5歳児では多く見られる。対等場面においては，対象の玩具を2人で一緒に使う，または一緒に使うことを提案する「一緒」の理由が年齢に関わらず，多く見られる。このことから，5歳児は山本（1991）の「先占の尊重」原則に従い，玩具を先に所持しているか否かで状況を判断して調整方法を自他尊重の中でも細かく変えていることがわかる。

以上のことから，4歳児は場面によって自己調整機能を変化させているが，場面による細かな状況に言及した回答は少ない一方で，5歳児は場面による物の所持状況を考慮した上で自己と他者両方を尊重した回答を行うことが示された。4～5歳頃という幼児期の終わり頃に着目すると，4歳児では自己調整において場面を考慮する様子が見られるのに対して，5歳頃になると，場面を考慮するだけでなく，その場面に言及した理由も答えるようになり，自己調整機能を決定する要因が変化することが明らかになった。また，4歳児から他者の存在を意識し，他者を考慮した調整が見られ，5歳児になると場面に関わらず一貫して他者を意識した調整をするようになる。年齢が上がるにつれてより他者の存在を意識した調整方法を選ぶことが示された。

カードの選択反応と自己調整カテゴリーの決定要因について

カードの選択反応と自己調整カテゴリーの決定要因の関係については，自己先取場面と対等場面の両場面において，「発話型」は「自他尊重」が多く,「他者尊重」が少ない一方で,「行動抑制型」は「他者尊重」が多いという結果になった。

絵カードの選択では，Table 6で示した通り，全ての場面において「発話型」がかなり多いことがわかる。したがって，カードの選択と自己調整カテゴリーの決定要因の関係は本研究の結果から考察するのは難しいが,「他者尊重」と「行動抑制型」の組み合わせが見られた理由として「個人差」の要因が考えられる。「他者尊重」で多いのは，相手におもちゃを譲る譲渡や相手の持っているおもちゃを取らない我慢である。4歳児は自己先取場面において全体的に「自己尊重」的な回答が多く見られたが，ある参加児は「行動抑制型」を選択した上で,「我慢しないとお友達が使えないから」という理由を述べた。また，5歳児のある参加児は他者先取場面，対等場面の両場面において,「行動抑制型」を選択した上で,「お友達が使いたいから」という理由で何もせずに我慢をすることを選択した。この2名の参加児から考えられることとして，この2名の参加児は日頃から控えめで他者を優先させる性格であるのかもしれない。自分の意思を主張することも「自己調整機能」には含まれており，時にはそれが正しいとされてしまうが，個人の性格や気質といった部分を抜きにして社会的に望ましい「自己調整機能」を一般化しようとするのは困難であるといえよう。この参加児の「行動抑制型」の裏にある思いや考えは本研究で理由質問を実施したからこそ見出された部分でもある。以上のことから,「自己調整機能」の研究を進めるにあたって，個人の性格や気質といった「個人差」も留意すべき重要な点であるといえる。

「その他」の解釈

4歳児に多く見られた反応に「その他」がある。その内容の中でも特に多かったのが「発話のみ」である。「発話のみ」とは，選択回答で「発話型」を選び，発話内容は決まっているものの，なぜその発話をするのかという理由が定かでないというものである。理由質問で「わからない」と回答した幼児が多い中,「こうしたほうがいいから」という回答が見られた。この回答には2つの解釈が考えられる。

第1は，子ども自身が思いや考えを言語化するのが困難な場合である。「発話のみ」が4歳児に特に多く見られたという点，さらには長濱・高井（2011）の研究で3歳児の口頭回答に無反応が多かった点を踏まえれば，言語化する能力は個人差があるとはいえ，年齢に比例して発達するものであるといえる。その言語化能力の有無が，理由質問に大きく影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

第2として,「こうしたほうがいいから」というのは，おそらく幼児が日常生活の中で養育者や友達との関係の中で身につけた方略であるために，なぜそうすべきなのかという答えを自分の中に持っていないのではないかと考えられる。理由質問の際に,「盗むのは泥棒のはじまりだから」「お母さんにその子は怒られるから」という回答も見受けられた。これらは自らの考えが伴った調整というよりはむしろ，外部から何かしらの経験で影響を受け，自らのルールに取り入れたものである。これは能動的な自己調整機能とはいえないが，対人関係の中で身に付けた慣習的なルールは，自己調整機能の発達において，意志や欲求をもつ前段階として重要なものではないだろうかと考えられる。この前段階があってこそ，幼児はなぜそうすべきなのかという問いを考えるようになり，やがて行動に自らの考えや意志を反映させるようになる。これが柏木(1988)の述べた主体性・能動性の獲得，すなわち「自己」の発達につながるといえよう。

上記に述べた2つの解釈はどちらが正当であるかは本研究では判断しがたい。今後の自己調整機能の研究において，言語能力の年齢差や道徳性の発達とともに検討すべき点の一つである。

本研究のまとめと課題

本研究で明らかになったことは，幼児は年齢が上がるにつれて自他を考慮した調整を行うようになることである。また，様々な他者との葛藤場面がある中で，4歳児であっても場面を考慮した調整を行い，5歳児になると，場面を考慮した上でさらに他者を気遣う一貫した調整を行うことができるようになる。

本研究の意義として，養育者の子ども理解をより深めることが期待できる。幼児は5歳児であれば，自らの意志をもった調整を行うことができるので，いざこざなどの対人葛藤場面にでくわしたときに，養育者の思う解決方法を子どもに提示しそれを強要するのではなく，まずは子どもの意見をそれぞれ聞くことが望ましい。発言や行動から見られなかった意志や願いが子どもの中に見られる可能性がある。その場合，どうすれば相手にそのことを伝えることができるのかを一緒に考えたり，相手にわかりやすく代弁してあげたりしてもよいと考えられる。

4歳児であれば,自らの意志をもって調整を行っている子もいるが，他者の思いに寄り添った調整はまだ難しい。「相手の気持ちを考えて行動をしなさい」と漠然と言うのでは伝わらないので，子どもの思いに共感した上で，お友達はどう思っているかなど，他者視点をゆっ

くり考えさせることが必要である。また，4歳児の中には外部から取り入れた善悪判断を行う子もいる。指導の際にはどうしてこの行動を取るべきなのか，普段から理由を教えてあげることが自己調整の発達につながるのではないかと考えられる。

幼児は自己の行動に何らかの理由や意志をもち，調整を行っている。大人ができることは，まず子どもの考えに寄り添い共感することである。それが自信となって「確かな自己」となり，主体的・積極的な自分へとつながるのではないだろうか。子育て不安や虐待，過保護などが見られる現代で，養育者が子どもの理解をより深め，意志をもった存在であると受け入れることで，養育者の子どもに対する考え方が変わり，子どもの豊かな成長を期待することができる。

この幼少期に身に付けた「確かな自己」は児童期や青年期のアイデンティティの発達に大きな影響を及ぼすと柏木（1988）は述べている。これは自己調整機能を幼児期に獲得することがいかに重要かを示唆している。現代特有の問題である過剰適応などはこの自己調整機能と深く関連していると考えられる。佐藤（2005）の大学生を対象に行った，自己主張と自己の発達の関連に注目した研究によれば，この2つには密接に関連が見られ，自己主張が他者と折り合うためのソーシャルスキルだけではなく，自己形成のプロセスにおいて極めて重要な発達課題であるとした。児童期や青年期の自己調整機能に関連した先行研究はまだ少ないが，幼児期から児童期，青年期にかけて自己調整機能は「確かな自己」を獲得する上で必要不可欠なものである。それぞれの時期の自己調整機能の発達を比較して研究することが本研究の今後の課題であろう。また，児童期や青年期の自己調整機能は幼児期と異なり，より客観的な視点を重視したものと考えられる。一般的には，他者のある行動に対して，その背後に心の状態を想定して理解する枠組みである「心の理論」は4～5歳で獲得するとされている。児童期になると，心の理論はより高度なものとなり，他者との複雑なコミュニケーションをすることが可能になる。本研究で取り扱ったような他者との葛藤場面に遭遇した時，児童期であれば，理由質問をしなくても，口頭回答から明確な理由を述べる子が見られる可能性がある。また佐藤（2005）も，大学生の自己主張には，対人関係において自分はどうあるべきかを考え，決定し，行動するといった自己の判断が伴うとしている。幼児期と児童期，青年期で自己調整機能の決定要因を比較すると，その差が顕著に見られる可能性が考えられる。

また，自己調整機能は実行機能の様々な面との関連が調べられている。実行機能とは，行為や思考のモニタリングやコントロールを果たすものとされ（Carlson, 2005），抑制制御，認知的柔軟性，ワーキングメモリの3つの構成要素が知られている。本研究でも実験において5歳児のほとんどの子は紙芝居をじっと座って聞いていたが，4歳児は途中で動き出してしまう子や物語の内容とは異なる回答をしてしまう子が見られた。物語を集中して聞き続けるのは抑制制御，3つある物語を別のものと判断しそれぞれ解釈するのは思考の切り替え，物語の内容を記憶しておくのはワーキングメモリが関連すると考えられ，それぞれの能力が本研究でも必要になると考えられる。実験に対する態度の面に関するものの他に，永野・清水（2016）の研究によると，自己調整機能と実行機能が社会的スキルに影響を及ぼすことが示された。社会的スキルとは，主張スキル，協調スキル，自己統制スキルの3つの尺度からなる。しかし，課題に挙げられているように自己調整機能と実行機能の2つの関連については十分に検討できていない。4，5歳に発達するとされる実行機能とともに自己調整機能との関連を検討することも望まれる。

さらに，本研究では紙芝居を用いて仮想場面を想定して実験を行ったが，子どもの回答に「社会的望ましさ」などの自己調整機能とは異なる要因が含まれてしまった可能性がある。それを排除するために，鈴木（2005）が用いた仮想課題と実験課題の2つを調べるなどする必要がある。

以上述べた課題を踏まえ，今後の自己調整機能の研究を深め，子ども理解や子どもの豊かな発育につなげていきたい。

謝　辞

研究にご協力いただきました学校法人大谷学園 鶴甲幼稚園の先生方と園児のみなさまに厚く御礼申し上げます。

引用文献

Bronson, M. B. (2000). *Self-regulation in early childhood: Nature and nurture*. New York: The Guilford Press.

Carlson, S. M. (2005). Developmentally sensitive measures of executive function in preschool children. *Development Neuropsychology, 28*, 565-616.

Carlson, S. M., & Wang, T. (2007). Inhibitory control and emotion regulation in preschool children. *Cognitive Development, 22*, 489-510.

柏木惠子（1988）．幼児期における「自己」の発達―行動の自己制御機能を中心に―　東京大学出版会

川田学（2019）．保育的発達論のはじまり　ひとなる書房

Kochanska, G., Murray, K. T., & Coy, K. C. (1997). Inhibitory control as a contributor to conscience in childhood: From toddler to early school age. *Child Development, 68*, 263-277.

Mischel, W., Shoda, Y., & Rodriguez, M. L. (1989). Delay of Gratification in Children. *Science, 244*, 933-988.

文部科学省（2009）．子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題

永野美咲・清水寿代（2016）．幼児の自己調整機能・実行機能が社会的スキルに及ぼす影響　幼年教育研究年報 , *38*,43-50.

長濱成未・高井直美（2011）．物の取り合い場面における幼児の自己調整機能の発達　発達心理学研究 , *22*, 251-260.

佐藤淑子（2001）．イギリスのいい子日本のいい子―自己主張とがまんの教育学　中公新書

佐藤淑子（2005）．大学生の自己主張と自己の発達　発達研究 , *19*, 65-80.

鈴木亜由美（2005）．幼児の対人場面における自己調整機能の発達：実験課題と仮想課題を用いた自己抑制行動と自己主張行動の検討．発達心理学研究 , *16*, 193-202.

田島信元・氏家達夫・柏木惠子（1986）．幼児の self-regulation の発達（1）その2―絵画自己制御能力テストによる測定の試み　日本心理学会第50回大会発表論文論集 , 507.

山本愛子（1995）．幼児の自己調整能力に関する発達的研究―幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について―　教育

心理学研究 , *43,* 42-51.
山本登志哉 (1991). 幼児期に於ける『先占の尊重』原則の形成とその機能―所有の個体発生をめぐって　教育心理学研究 , *39,* 122-132.